

Φ.Ⅱ. チュッチェフ政治詩試訳(10)

大 矢 温

はじめに

「チュッチェフ政治詩試訳(1)～(9)」に引き続いて六巻本全集をテキストに、チュッチェフの政治思想を分析する上で手がかりになりそうな詩の翻訳を試みる。引き続き、主にタラーソフ編集のチュッチェフ著作集『ロシアと西欧』において「哲学詩」として分類されたものを対象に訳を進める。

1) 「無題」¹

私は、谷間に栖を結んだが、
私もまた時に感じる、
空の高みで生き生きと
空気が流れる走る様を、－
我らの胸が厚い層を振り切ろうとする様を、
天上のものを渴望する様を、
すべて息詰まる地上のものを
それが退けたがる様を…

近寄りがたい大山塊を
私は見る何時間でも、－
いかなる露と寒気とが
そこからざわめきと共に我らのもとに流れ来るかを、

突然火色に明るくなる
その処女雪が一
こっそりとそこを通り過ぎていく
天上の天使の足が。

「空の高み」にそびえる「大山塊」と「谷間に栖を結」ぶ矮小な人間との対比である。地上の些事を振り切って上方を希求する、「無題（何と人気のない溪谷だろう）」²、あるいは「噴水」³にも通じるテーマである。

1860年10月にジュネーヴを訪れた際の作と考えられている⁴。この年の後半、チュッチェフはドイツの湯治場での痛風治療を名目にデニーシエヴァとともにロシアを出て⁵、9月中頃からジュネーヴに留まっていた⁶。ほどなく、この年の10月にはデニーシエヴァは当地ジュネーヴで息子フォードルを出産している⁷。チュッチェフが再びロシアに戻るのは翌年5月下旬のことである⁸。

このことと「こっそりと」「通り過ぎていく」「天上の天使」とは何か関係があるのだろうか。ちなみにこの時期、妻のエルネスチーナはチュッチェフの領地オーフツクに滞在していた。

2) 「新約を送るに当たって」⁹

安からぬ籤が、喜ばしからぬ籤が、
お前のために引かれた運命によって、
お前は早くから過酷な人生との
多勢に無勢の戦いに入った¹⁰。

お前はまれに見る勇気を持って戦った、
この宿命的な戦いの中で
最も厳しい試練から
自らのすべての魂を引き出した。

いや、人生はお前に勝たなかった、
お前は絶望的な戦いの中で
一度も、そうお前、裏切らなかった
心の真実も、自分をも。

だがあらゆる地上の力が足りない：
悪の生命が荒れ狂っている—
そして我らは、墓の淵にいるがごとく、
突然恐ろしく苦しくなる。

ほら、そんなときに愛と共に、
この本のことを思い出さない—
そして心を込めて、枕へのごとく、
それにすがって休みなさい。

最初の妻エレオノーラとの間に生まれた最初の娘アンナに宛てたもの。1861年の作とされているが¹¹、それ以上詳細な時期は不明。エレオノーラは1838年8月、アンナが9歳の時に海難事故がもとで亡くなり、その後、アンナはエレオノーラの両親の元に預けられドイツで育てられた。しかしながらこの詩において人生が「多勢に無勢の戦い」であり、「宿命的な戦い」であり、「絶望的な戦い」と謳われているのはそれだけが理由ではない。「二つの声」にも見られるように¹²、チュッチェフは死を運命づけられている人間の有限の生に意義を認めているのである。第4聯目の「悪の生命」とは、自然のカオスから自己を定立した人間のエゴイズムのことであろう。「イタリアのヴィラ」¹³における「悪しき生命」にも通じる思想である。

3) フェートへ¹⁴

1)

君に私の心からの挨拶を
それから私の、どんなものであれ、肖像画を、
そして、思いやりある詩人よ、
声には出さねどそれをして君に語らしめよ
いかに君の挨拶が私に貴重だったか、
いかに私がそれに感動したか。

2)

自然から
予言の盲目的本能を与えられている人もいる¹⁵、一
彼らはそれによって鉱泉を感じ聞くことができる
暗い地底の深くでも…

君よ、**偉大な母**によって愛されている
君の才能は百倍もうらやましいー
君は一度ならず目に映る外皮の下に
君はそれ自身を見た…

詩人のフェートに捧げられた二つの詩が一つの作品としてまとめられている。前半は1862年4月、後半は1861年の作とされている。1965年にチュッチェフの詩集『叙情詩』を編纂したピガリョーフは別々の詩として扱っているが、6巻本の全集ではこの2編の詩を後にチュッチェフ自身が一つの作品にまとめられたと考え、1編の詩として扱っている¹⁶。

4) 皇后マリア・アレクサンドロヴナに¹⁷

1)

誰であろうとあの方に、
無垢な、あるいは罪ある魂に、出会うのならば、
即座により生き生きとを感じるものだ
よりよき世界があることを、霊の世界があることを。

2)

解けない秘密のように、
生きた魅力があの方の中で息づくー
私たちは不安なおののきと共に見る
あの方の両瞳の静かな光をー

その魅力は地上のものか、
または天の恵みか？…
魂はあの方に祈りたがるが、
胸は崇拜せんと張り裂ける…

1864年11月の作とされている¹⁸。デニーシエヴァと死別したチュッチェフは（デニーシエヴァは1864年8月4日にペテルブルクで肺結核によって病死している）、1864年10月中旬から翌年2月までニースに滞在しており、12月7日には皇太子ニコライの婚約のために同じくニースに滞在中だった皇后マリア・アレクサンドロヴナと会食している¹⁹。その時の印象をもとに作った詩と考えるのが自然であろう。チュッチェフと最初の妻エルネスチーナとの間の長女アンナは1853年から、2番目の娘ダリアは1858年からマリア・アレクサンドロヴナ付きの女官をしていたこともあって、チュッチェフは特別扱いで皇后に近づくこ

とができた。そのような事情もあって、この詩は忠君的な立場から皇后の神秘的な魅力をひたすら謳い上げたものになっている。

5) 無題²⁰

おお、この南、おお、このニース…
おお、何とそれらの輝きは私の心を乱すのか—
生シースニは、射られた鳥のように、
上ろうとするが—できない…
飛翔もなければ、翼幅もない—
折れた両翼が垂れ下がっている—
生はすべて、屍に慣れてしまい、
痛みと無力におののく…

1864年11月21日の作とされている²¹。地中海に面した南仏の保養地ニースの陽光に満ちた風景とは裏腹にデニーシエヴァの死から立ち直れずに打ちひしがれたチュッチェフの様子がうかがえる。デニーシエヴァの兄のゲオルギエフスキーに宛てた手紙でもチュッチェフは「いかなる明るい12月の太陽も、その明るく暖かい空も、その海も、そのオリーブも橙の木も、何も消すことのできない異国感、孤独感」を告白している²²。別の手紙でも「地獄の苦しみ」を訴えている²³。しかし一方でチュッチェフは、この鬱状態からの救いをモスクワでの仕事に見出してもいる。「活動だけが私を救うことができるのです」²⁴。

悲しみを仕事の忙しさによって紛らわせようとしたとも取れるが、その背景として、「二つの声」²⁵、「無題（郷から郷へ、町から町へ）」²⁶などに見られる、死を運命づけられながらもその有限の生のなかに意義を見出す人間観に通じる思想を読み取ることも可能であろう。その際彼が意図した「活動」とは、単なる詩作に留まらず、広く言論活動一般のことであったと解すべきである。ローマ法王ピウス9世の回状に対する彼の詩「ENCYCLICA」における「変節の

ローマで、キリストの偽代官に罰が下る」という厳しい非難もこの文脈で理解すべきであろう²⁷。

6) 無題²⁸

神の同意がない時には、
いかに彼女が苦しもうとも、愛しながら、－
魂は、嗚呼、苦難の末に幸福を得ることはない、
苦難の末に自らを得るかも知れないが…

魂よ、ひたぶるに
秘めたる愛だけに身を委ね
愛のみに生き、気を病む魂よ、
神よお前を祝福したまえ！

あの方は慈悲深く、万能だ、
あの方は暖める、その光線によって
屋外に咲き誇る、華麗な花も、
海底の純粋な^{パール}真珠も。

「秘めたる愛」に殉じる魂を祝福する内容である。手稿には「1865年1月11日」の日付と娘ダリア宛のメモが付記されているので²⁹、自然に読めばこの「秘めたる愛」の当事者はダリアになりそうだが、1979年の詩集の注釈でコジノフはこの詩をデニーシエヴァと関係があるとしている。メモによると「ニースからシエミへ」の途中で作られたとされるが、シエミはニース市の北東部、中心からもほど遠くない位置なので、この場合の「シエミ」とは地名というよりは馴染みの場所、たとえば知人宅や病院などを指すものと考えられる。

7) 無題³⁰

何と素晴らしいのだお前よ、おお夜の海よ、一
こちらは明るく輝き、あちらは灰青色に暗い…
月の輝きの中で、まさに生き物のごとく、
それは歩み、息づき、煌めいている…

終わりのない、囚われのない広がりの中で
煌めきと動きとが、^{とどろき}轟と轟音が…
くすんだ輝きに満たされた海よ、
何と素晴らしいのだ人無き夜のお前よ！

偉大な浪よお前は、海の浪よお前は、
誰の祝日をこのように祝っているのかお前は？
波が轟き煌めきながら、どンドン広がり、
静まりかえった星々は高みから眺めている。

この波の中で、この光の中で、
すべては、夢の中のように、私は呆然として立っている—
おお、何と望ましいことかこの陶醉の中に
私のすべての魂を沈められたら…

手稿の書き込みから1865年1月2日のニースでの作とされている³¹。自然の
カオスとしての夜の海、そして高みで超然と輝く星々という、「無題（大海が
地球を覆うがごとく…）」³²とも共通する状況である。それと同時にこの詩にお
いても「透明で不可視のエーテルの中で」「星になれたら」と願う「魂」³³や30
年代末の作品「白鳥」³⁴において描かれる「純粹な自然」に包まれた白鳥、あ

るいは36年5月の「無題(灰青色の陰が溶けあい…)」³⁵における「まどろむ世界と混ぜ合わせておくれ!」という叫びに見られるような、自然との合一を希求する思想を読み取ることができる。すでに見てきたように、チュッチェフにとって人間とは自然のカオスから自意識あるいはエゴイズムによって自己を定立して生まれるものであった。したがってこの詩において自然との合一を希求する「私」は自我を失い、無我の「陶酔」の中で「呆然として」立ち尽くすしかないのである。

8) 無題³⁶

受難者のような私の停滞の中に
いつ何時よりも恐ろしい日々刻々がある…
その重荷、その必滅の重圧を
語り尽くせない、耐えきれない、私の詩は。

突然すべてが途切れる。涙や感動には
至れない、すべてが空虚で暗い、
過去は淡い面影となって漂うことなく、
それは死体のように、地の下に横たわる。

ああ、その上で鮮やかだが、
愛もなく陽光もない現実の中に、
同じ世界がある、魂もなく情熱もない、
彼女を知りもしなければ、覚えてもない世界が。

そして私は一人、うつろな憂いを抱きながら、
自らを意識したいができない—
壊れた小舟が、波にうち捨てられている、

荒れ果てた名も無き岸に。

おお神よ、身を焦がす苦難を与え給え
そして私の魂の仮死状態を吹き払い給え—
あなたは彼女をお取りになった、だが彼女を思い出す苦しみ、
この生々しい苦しみは、私に残し給え、—

彼女の、絶望的な戦いの中で、
最後の最後までその戦功を立て、
人々にも運命にも逆らって；
炎のごとく、かくも熱く愛した、彼女の思い出を、

彼女の、^{あらが}運命に抗えなかったが、
運命に征服もさせなかった彼女の；
彼女の、最後まで
悩み、祈り、信じ、そして愛すことができた彼女の。

チュッチェフがニースからペテルブルクに戻った後、1865年3月末の作と考
えられている³⁷。相変わらずデニーシエヴァを失った痛手から立ち直れていな
い。第2聯、第3聯は地下と地上、過去と現在の対比である。明るい地上の現
在に生きながらもチュッチェフは「自らを意識したいができない」抜け殻のよ
うな「魂の仮死状態」に陥っている。自意識によって自らをカオスから定立で
きないでいるのだ。ここで「小舟」が登場するが、同じ「小舟」でも、「自然
の声」に呼ばわれて満天の星空のもと、「暗き波間」に「魔法の小舟」に乗っ
て一気に運びさられる、という「無題（大海が地球を覆うがごとく…）」³⁸の高
揚感とは対照的な絶望感である。チュッチェフの詩において「小舟」は自然の
カオスを渡る自意識のシンボルと考えられる。

上記の2)「新約を送るに当たって」において見てきたように、チュッチェフ

にとって人生は戦いであった。この詩においてもデニーシエヴァの人生は「絶望的な戦い」である。チュッチェフは、その「戦い」の中で立派に戦い通し、愛を貫いたことに彼女の人生の価値を認めようとしているのである。

9) 無題³⁹

彼は、死に瀕しながらも、疑った、
我々は不吉な思いに悩まされた…
だが**神は**、故あって、彼の中に現れた—
神はご自分の選良を信じているのだ。

労苦の中で百年が経った—
そしてほら、日ごとに立派になり、
母なる**言葉**は、すでに広く
彼の追悼記念日を祝っている。

もはや囚われもなく、
以前の枷から解放された—
理性的な自由の身で
それは彼に挨拶した…

そして我々、感謝に満ちた子孫たちは、
彼のすべての良き功績によって、
真理と科学の名において
ここに永遠の記念を宣言する。

そう、彼の意義は偉大だ—
彼は、**ロシア**の知性に忠実な、

啓蒙を我らに勝ち取ったー
我らをそれに服従させなかったー

旧約聖書の闘士のように
天の力と戦った
夜明けの星までー
そして夜の戦いで持ちこたえた⁴⁰。

1865年4月4日に科学アカデミーで予定されていたロマノフ没後100周年の記念式典に向けて書かれたもの⁴¹。ロマノフはロシア人最初のアカデミー会員として西欧の学問のロシア化に貢献した。ロマノフに対するこのような高い評価から、逆に、ネッセリローデやブードベルクなどのドイツ人官僚に対するチュッチェフの反感を読み取ることもできよう⁴²。この詩からもチュッチェフが単なる旧套墨守派の反啓蒙思想家でないことは明らかである。

10) 無題⁴³

ツァーリのご息子がニースで死に瀕しているー
それをもとに我らに讒言が企まれる…
「それはポーランドが故のお父上への罰である」、ー
これが、私たちがここで、首都で耳にすることだ…

誰の野蛮で、狭量な考えから、
この言葉が漏れ出ることができたのか？…
このように語るのは誰だ：ポーランドの坊主か、
誰かロシアの大臣か？

おおこの致命的な噂を、

母なる大地のすべての出来損ないどもの、
無分別な犯罪的なおしゃべりを、
いや聞かないし…いや轟きもしない。

指弾としてもーいや轟かない

過日の、恐ろしい叫びは：

「至る所に裏切りがーツァーリは虜になっている！」ー
しかもルーシは彼を救いに立ち上がらない。

アレクサンドル二世の長男、ニコライの病気がテーマとなっている。皇太子の病気という「ロシアの悲劇」を「悪意ある歓び」としている内外の人々を非難することが創作のモチーフである、とされている⁴⁴。自筆の書き込みから皇太子の死の直前、1865年4月7-11日の作と考えられている⁴⁵。

ここでチュッチェフが国外の悪意ある人(「ポーランドの坊主」という時、彼が念頭に置いていたのは、おそらく亡命中のゲルツェンである。この論点については、この時期、ニースと家族の死をめぐる、アレクサンドル二世とゲルツェン、そしてチュッチェフが交錯するので、ここで若干整理しておきたい。

チュッチェフがこの詩を書いた時期は、デニーシエヴァを前年の8月に肺結核で失った傷心のチュッチェフがロシアを後にし、ヨーロッパ各地を転々とした後、再びロシアに帰って妻エルネスチーナとともに生活していた時期に当たる。また彼は、この詩の少し前、3月9日には、ニースからの帰国の途中のパリでゲルツェンと会見している。会見の具体的な内容は不明である⁴⁶。ただし、その翌日の朝8時にゲルツェンは前年12月にジフテリアが原因で相次いで亡くなった二人の子供(エレナとアレクセイ)の亡骸をパリのモンマルトル墓地から出棺し、午後3時半の列車で再埋葬のためにニースに旅立ったことが知られている⁴⁷。

ニースからやって来たばかりのチュッチェフにとっても、これから子供たちを再埋葬するためにニースに旅立つゲルツェンにしても、会話の中にニースの

話題が出たと考えるのが当然であろう。しかも、政府と反政府、両勢力を代表するイデオログ同士の会談である、皇室の話題、就中、当時ニースで闘病中だった皇太子ニコライの話題が出ない方が不自然である。特に「ジャーナリスト」としてのゲルツェンにとってニースにおける皇太子の病状に関する情報は貴重なものだったはずだ。

また、ポーランド問題に関しても、この両者は正反対の立場を採っている。とすれば、皇太子の病気を父帝のポーランド弾圧の報いとする「噂」もまた、ポーランド蜂起を支持するゲルツェンの口から語られた可能性が有る。少なくともこの会見に於いてそれに類するほめかしがあったと推測するのが妥当であろう。

実際ゲルツェンは、皇太子が没した後の1865年5月25日号の『鐘』に「皇帝アレクサンドル二世へ」(日付は5月2日)と題する公開書簡を発表し、その中で皇太子の死と結びつけて「ムラヴィヨフ一派」によるポーランド弾圧を厳しく非難している⁴⁸。他方ロシア国内でも、「首吊り人」とあだ名をつけられたM. H. ムラヴィヨフによるポーランド弾圧については批判が相次いでいた⁴⁹。しかし、そのような世論にもかかわらず、ポーランド一月蜂起鎮圧の功績によって彼に公爵位が授けられる。このことがより一層、ムラヴィヨフに対する批判を呼ぶこととなった⁵⁰。当然、その批判は公爵位を授けたツァーリ自身に向けたと考えられる。

他方、3月末に帰国したチュッチェフは⁵¹、ニースからの貴重な情報源としてペテルブルクで珍重される⁵²。ペテルブルクの上流社会にとってもニースの皇太子の病状は関心の的だった。そのような上流社会における会話の中でチュッチェフは、ゲルツェンの口からのみならず、ペテルブルクでも同じ「噂」を「ロシアの大臣の誰か」の口から耳にすることになったのであろう。さらに帰国後の会話の中で彼は、ペテルブルクでポーランドとの「和解が説かれている」ことを知るに至り、そのような和解意見は「愚鈍か裏切りである」と強く反発している⁵³。この詩においても、ポーランド問題を期に表面化したツァーリに対する人心の離反を危惧する、彼の激しい危機感が伝わってくる。

ところで、最後の4聯目に若干の疑問が残る。第1聯から第3聯までは皇太子の病氣とポーランド弾圧とを結びつける「噂」についてである。このような悪意ある噂を聞く者はないし国内世論にも影響を与えない、というのがチュッチェフの立場である。これに対して第4聯の「至る所に裏切りが」という「叫び」は、このような悪意ある噂を「指弾」しツァーリを擁護する立場である。しかしチュッチェフはこの「叫び」もまた、世論に影響を与えないとしている。ツァーリは相変わらず世論の中で孤立しているのである。この辺にチュッチェフの底深い危機感を感じることもできよう。しかし他方で、誰がこの「叫び」をあげたか、という問題が残る。一つの可能性として、当時モスクワで流布していたコンスタンチン大公による皇太子暗殺の噂を挙げることができる⁵⁴。この噂に関しては、皇太子の死に際してモスクワで集会が開かれ、そこでコンスタンチン大公のせいであるという「叫びが響いた」というニキテンコの証言もあるからだ⁵⁵。ニキテンコが記す「叫び」が実際に「響いた」のは皇太子の死後としても、陰謀の「噂」はすでに皇太子の生前から流れていたのではないだろうか。

11) 1865年4月12日⁵⁶

すべては決し、彼は安らかだ、
最後まで耐え抜いた彼は、—
おそらく、彼は**神**の御前で
別の、よりよい花束にふさわしかった—

別の、よりよい遺産に、
自らの**神**の遺産に、—
彼は、少年時代から我らの歓びだった、
彼は、我らのものにあらず、**かの方**のものだった…

彼らの間と我らの間には
強い自然の結びつきがある：
全ロシアの心とともに
今彼はそのために祈る、－

ロシアのために、その試練の辛苦を
理解し、推し量るのは、ただ
自らの受難を清めて、
十字架のもとに、泣きながら、立っていた彼女のみ…

手稿に付けられていた日付から、1865年4月12日の作とされている⁵⁷。しかしながら、この詩は皇太子の葬儀の様子を題材にしたものである。チュッチェフは3月初めにニースを発ち、カンヌ経由でパリに向かっているので、4月12日にニースで亡くなった皇太子ニコライの仮葬儀には出席していない。他方、5月17日付の彼の手紙が残されているので⁵⁸、ペテロ・パヴロフスク寺院で執り行われた5月26日の追善供養には立ち会った可能性が有る。したがって、日付は創作の日付ではなく、この詩のテーマから来る表題と解すべきである。

最後の4聯目で「十字架のもとに、泣きながら、立っていた」とされるのは、おそらく皇太子の母親の皇后マリア・アレクサンドロヴナであろう⁵⁹。

12) 無題⁶⁰

何と正しく人々の良識は
単語の意味を定義したことか：
おそらく、故なきことではない、「看護」^{ウホート}から
単語「辞職した」^{ウホヂェル}を派生させたのは…

皇太子ニコライの後見人だったC. Γ. ストロガノフ公爵を非難したものの。ロ

シア語の動詞ウハヂーチ (УХОДИТЬ: 辞職する) の名詞形ウホート (УХОД) には「辞職」という意味のほかに「看護」という意味もある。本来、病気のニコライを看護しなければならない立場のストロガノフ公爵が病気の皇太子に無理を強いて死に至らしめた、とのチュッチェフの認識が下地になっている⁶¹。

13) 無題⁶²

岸辺の葦には音楽的な調和性がある (羅)

海の波には歌調子がある、
自然の諍いの中に調和がある、
ミュージック的なせせらぎ音が
そよぐ葦の茂みの中に広がっている。

すべてのものの中に泰然自若たる調和がある、
完全な共鳴が自然の中にある、—
ただ我らの幻のような自由の中のみ
我々はそれとの不調和を認める。

どこから、どのようにこの不調和は起こったのか？
そして何が故に、魂は歌わないのか
全般的な合唱の中で、海が歌うものを、
そして考える葦はざわめいているのか？

エピグラムは帝政末期のローマ帝国の詩人デキムス・アウソニウスからの引用であるが、最終行に「考える葦」とあるようにパスカルの影響が見られる⁶³。ちなみにチュッチェフからの娘 MARIA への1860年のクリスマスの贈り物はパスカルの『パンセ』であったという⁶⁴。『パンセ』はチュッチェフのお気に入りの著作と考えられる。とはいえ、内容的にこの詩のモチーフは、自然がもつ全

一般的な調和のリズムと、自我を解放することによってその自然と不調和を来す人間との対比である。ここに神的秩序と人間理性を対比したパスカルとの思想的近似性を見ることができ、むしろ坂庭氏も指摘しているように⁶⁵、シェリングの『人間的自由の本質』の影響を指摘するべきであろう。すでに見てきた「イタリアのヴィラ」⁶⁶にも通じる思想である。

1865年5月11日の作とされているので⁶⁷、チュッチェフにとっては5月2日にデニーシエヴァとの間の娘、エカテリーナを肺結核で失い、翌日やはりデニーシエヴァとの間の息子コーリャも失った直後ということになる。相次いで近親者を失ったチュッチェフが、人生のはかなさという自らの1830年代のテーマに戻ったとも考えられる。

むすび

今回対象になった期間は、時期的には短い期間であったが、チュッチェフ自身にとってはデニーシエヴァの死後、傷心を抱えてのヨーロッパ歴訪、ゲルツェンとの会見、皇太子ニコライの死、そして帰国後のデニーシエヴァとの子供たちの死、と大きな事件が連続した時期であった。特にゲルツェンとの会見は思想史上重要な事件であるので、より一層の分析が必要であろう。

注

- 1 Тютчев Ф. И. «*** (Хоть я и свил гнездо...)» // Полное собрание сочинений и письма в шести томах. М., 2002-2004 (далее “Тютчев”). Т. 2. С. 103.
- 2 拙稿「Ф. И. チュッチェフ政治詩試訳(8)」、『文化と言語』第71号、2009年11月、72頁参照。
- 3 同上、74頁参照。
- 4 См. “Комментария” // Тютчев. Т. 2. С. 459.

- ⁵ この年の2月にチュッチェフは激しい痛風の発作に襲われて、2月後半はほとんど自宅で妻の看病を受けながら病床に伏せていた。См. *Динесман Т. Г. и др.* Летопись жизни и творчества Ф. И. Тютчева. Мураново, 2003. Кн. 2. С. 349-350. 3月に入っても病状は好転せず、「鳥かごの中の鳥のような」状態が続いた。Там же. С. 352. 外出するようになるのは4月に入ってからだった。Там же. С. 354.
- ⁶ Там же. С. 364.
- ⁷ Там же. С. 374.
- ⁸ Там же. С. 359.
- ⁹ «При посылке нового завета» // Тютчев. Т. 2. С. 113.
- ¹⁰ 「多勢に無勢の戦い」とは、すでに見てきた「二つの声」などでも用いられる表現であるが、チュッチェフにとって人生の闘争とは常に、「悪く、恐ろしい世界の中で」「自らの魂を守るため」の「多勢に無勢」で「宿命的」で「絶望的」な「厳しい」戦いであった、との指摘もある。См. *Попова О. В.* Проблема человека в философском наследии Ф. И. Тютчева // Вестник МГТУ. 2008 г. № 4. Т. 11. С. 693.
- ¹¹ См. “Комментария” // Тютчев. Т. 2. С. 470.
- ¹² 拙稿「Ф. И. Чюच्чеф政治詩試訳(6)」、『文化と言語』第68号、2008年3月、111-112頁参照。
- ¹³ 「政治詩試訳(8)」、78-79頁参照。
- ¹⁴ «А. А. Фету» // Тютчев. Т. 2. С. 117.
- ¹⁵ 「狂気」にも地下の水脈を見つけ出す超能力者が登場する(拙稿「Ф. И. Чюच्чеф政治詩試訳(5)」、『文化と言語』第67号、2007年11月、93-94頁参照)。フェートはこの超能力者のように自然の言葉を理解する能力があり、自然の愛を受けて自然自体を見る能力がある、と持ち上げられているのである。
- ¹⁶ См. “Комментария” // Тютчев. Т. 2. С. 475.
- ¹⁷ «Императрице Марии Александровне» // Там же. С. 130.
- ¹⁸ См. “Комментария” // Там же. С. 492.

- ¹⁹ См. Чулков Г. Летопись жизни и творчества Ф. И. Тютчева. М.-Л., 1933. С. 163-164.
- ²⁰ «*** (О, Этот юг...)» // Тютчев. Т. 2. С. 131.
- ²¹ См. “Комментария” // Там же. С. 493.
- ²² Письмо А. И. Георгиевскому от 10-11 декабря 1864 г. // Тютчев. Т. 6. С. 86.
- ²³ Письмо А. И. Георгиевскому от 13 декабря 1864 г. // Там же. С. 88.
- ²⁴ Письмо от 10-11 декабря // Там же. С. 86.
- ²⁵ 「政治詩試訳(6)」、111-112 頁参照。
- ²⁶ 「政治詩試訳(8)」、69-70 頁参照。
- ²⁷ 大矢他 「Ф. И. ЧюцчЕф政治詩試訳(3)」、『文化と言語』第 65 号、2006 年 11 月、207 頁参照。
- ²⁸ «*** (Когда на то нет Божьего согласия...)» // Тютчев. Т. 2. С. 134.
- ²⁹ См. “Комментария” // Там же. С. 498.
- ³⁰ «*** (Как хорошо ты...)» // Там же. С. 135.
- ³¹ См. “Комментария” // Там же. С. 499.
- ³² 拙稿 「Ф. И. ЧюцчЕф政治詩試訳(7)」、『文化と言語』第 70 号、2009 年 3 月、92-93 頁参照。
- ³³ 同上、93 頁参照。
- ³⁴ 同上、91-92 頁参照。
- ³⁵ 「政治詩試訳(8)」、71 頁参照。
- ³⁶ «*** (Есть и в моем страдальческом застое...)» // Тютчев. Т. 2. С. 137. 先行訳については、坂庭敦史、早稲田大学大学院文学研究科博士論文『フォードル・ЧюцчЕф研究』、2004 年、223 頁参照。
- ³⁷ См. “Комментария” // Тютчев. Т. 2. С. 501.
- ³⁸ 「政治詩試訳(7)」、92-93 頁参照。
- ³⁹ «*** (Он, умирая, сомневался...)» // Тютчев. Т. 2. С. 138.
- ⁴⁰ 旧約聖書創世記第 32 章に神と格闘し、神からイスラエルという名を授けられたヤコブについての記述がある。

- ⁴¹ См. “Комментария” // Тютчев. Т. 2. С. 503.
- ⁴² 外務大臣のゴルチャコフに宛てた手紙の中でチュッチェフはドイツ人官僚に対する反感を露わにしている。См. Письмо А. М. Горчакову от 10 апреля 1865 г. // Тютчев. Т. 6. С. 100-101.
- ⁴³ «Сын царский умирает...» // Тютчев. Т. 2. С. 139.
- ⁴⁴ См. “Комментария” // Там же. С. 506.
- ⁴⁵ Там же. С. 505.
- ⁴⁶ 3月9日付の手紙の中でゲルツェンはオガリョフにこの会談について語っている。Герцен А. И. Письмо Н. П. Огареву от 9 марта 1865 г. // Собрание сочинений в 30-и томах. М., 1963 (далее “Герцен”). Т. 28. С. 48.
- ⁴⁷ Письмо Н. П. Огареву от 8 марта 1865 г. // Там же. С. 46.
- ⁴⁸ «Письмо к императору Александру II» // Герцен. Т. 18. С. 337.
- ⁴⁹ ニキテンコは1865年3月26日の日記でムラヴィヨフの西北地方県知事解任の噂について記している。Никитенко А. В. Дневник. Л., 1955. Т. 2. С. 505. 「首吊り人」の世評については、エドワード・ラジンスキー著、望月哲夫・久野康彦訳『アレクサンドル II 世暗殺 (上)』日本放送出版協会 2009年、256頁参照。
- ⁵⁰ См. Советская историческая энциклопедия. М., 1966. Т. 9. С. 811-812.
- ⁵¹ 娘マリアの日記によれば3月26日 (См. Чулков. Летопись. С. 167.)、ニキテンコの日記によれば彼は30日付の日記に「3日前」と記しているので27日ということになる (Никитенко. Дневник. Т. 2. С. 505)。
- ⁵² ニキテンコもネフスキー通りで偶然会ったチュッチェフからニースの様子を聞いている。Там же. С. 505, 516.
- ⁵³ Там же. С. 506.
- ⁵⁴ Валуев П. А. Дневник. М., 1961. Т. 2. С. 35.
- ⁵⁵ Никитенко. Дневник. Т. 2. С. 509.
- ⁵⁶ «12-ое апреля 1865» // Тютчев. Т. 2. С. 140.
- ⁵⁷ См. “Комментария” // Там же. С. 506.

- ⁵⁸ Письмо А. И. Георгиевскому от 17 мая 1865 г. // Тютчев. Т. 6. С. 97.
- ⁵⁹ 追善供養に参列したヴァルーエフによれば、皇后は立ってられないほど激しく「号泣」したという。См. *Валуев П. А.* Дневник. М., 1961. Т. 2. С. 46.
- ⁶⁰ «*** (Как верно здравый смысл народа...)» // Тютчев. Т. 2. С. 141.
- ⁶¹ チュッチェフはニキテンコに皇太子の死因をストロガノフ公爵の「ばかげた養育方法」にあると語っている。 *Никитенко.* Дневник. Т. 2. С. 509. さらにチュッチェフは、医者 の忠告を無視して海水浴をさせた件についてもニキテンコに語っている。См. Там же. С. 516.
- ⁶² «*** (Певучесть есть в морских волнах...)» // Тютчев. Т. 2. С. 142.
- ⁶³ この詩に関して、最初にパスカルの『パンセ』からの引用について言及したのはおそらくブランтである。(*Брандт Р. Ф.* Материалы для исследования «Федор Иванович Тютчев и его поэзия» // Известия отделения русского языка и словесности императорской академии наук. С-Пб., 1912. Т. 16. Кн. 2. С. 205.) チュッチェフの伝記の作者であるピガリョーフもまた、この詩とパスカルとの関係について言及している。(*Пигарев К.* Жизнь и творчество Тютчева. М., 1962. С. 27.) この詩とパスカルの関係について本格的に論じたものとしてはタラソフの研究がある。(*Тарасов Б. Н.* Тютчев и Паскаль (антиномии бытия и сознания в свете христианской онтологии) // Русская литература. 2000. №3.) また、トルストグゾフはパスカルに加えて聖書の影響を指摘しながらホラティウス、ルソー、バイロン、そしてシラーなどの影響も検証している。
(*Толстогузов П. Н.* Стихотворение Ф. И. Тютчева «Певучесть есть в морских волнах...»: структурная и тематическая роль цитат и реминисценций // Филологические науки. М., 1999. №1.)
- ⁶⁴ См. *Динесман* Летопись. Кн. 2. С. 379.
- ⁶⁵ 坂庭前掲書 160-161 頁参照。
- ⁶⁶ 「政治詩試訳(8)」、78-79 頁参照。
- ⁶⁷ См. “Комментария” // Тютчев. Т. 2. С. 508.
(本研究は、科研費 (基盤研究(B)21330030) の助成を受けたものである。)